

発達支援研究所ホームページ <https://smart-kids.co.jp/lab/>



スマートキッズジュニア本八幡

絵具を流してカラフルにした模造紙に、たくさんのボールを書き込んでいきました。野球やサッカー、ラグビー、バレーボール、バスケットボール。様々なボールが飛び交う、エキサイティングな教室が出来上がりました。

創造的かつ包括的なクラシック音楽と

神経多様性(ニューロダイバーシティ)のためのスペースについて

東京藝術大学大学院 研究生 ジュリア・ヒル(Julia Hill)

1 神経多様性への理解が広がる中で

近年、神経多様性(ニューロダイバーシティ)という考え方への理解が、社会の中で広がりを見せています。人の脳や神経の働き方は一人ひとり異なり、その違いを欠点ではなく、人間の自然な多様性として尊重しようという考え方です。

その流れの中で、「どのようにすれば、さまざまな神経特性のある人々が安心して力を発揮できる環境をつくることができるのか」という問いが、多くの分野で重ねられるようになってきました。

私は今年5月、オーストラリアン・ユース・オーケストラのメンバー3名とともにポッドキャストを収録し、クラシック音楽の世界における神経多様性への理解、個々の経験、そして包括的なスペースを築くための工夫について語り合いました。

今回のきらっとでは、その対話の内容をもとに考察します。



オーストラリアン・ユース・オーケストラ2025年
ヨーロッパツアー、アムステルダム
写真提供:ハロルド・デ・スメット

2 神経多様性とは

神経多様性とは、人の脳の働き方や感じ方、考え方の違いを「人間らしい多様性」として捉える考え方です。

自閉スペクトラム症(ASD)やADHD(注意欠如・多動症)をはじめ、強迫性障害、トゥレット症候群、ディスレクシア(読字障害)、発達性協調運動障害なども、その範囲に含まれることがあります。

ポッドキャストの参加者たちは、「神経多様性は人によって現れ方が異なり、その体験や課題もさまざまである」という点を強調していました。

この多様性への理解と尊重が、共に生きる社会の出発点となります。

3 個人の経験と日常の挑戦

日常の中で誰もが当たり前のように行っていることも、人によっては困難に感じられることがあります。ある参加者は次のように話していました。

「なぜ全てがこんなに難しく感じるのか、自分でもわからずに悩んでいました。

学校の課題や音楽の練習でも、何時間も集中して取り組んでいるのに、いつも締め切りギリギリ。

それでも思うような成果を出せなかった時期もありました。」

また、別の参加者は、演奏の最中に起こる心の動きを次のように語りました。

「演奏中に数を数えている途中で、『本当に5拍まで数えた?』という疑いが浮かんでしまう。

正しくやっているのに、自分を疑って混乱してしまうことがあります。」

このような体験は、決して珍しいものではありません。

効率や即応性が重視される環境では、特性のある人々が、こうしたストレスを抱えやすくなりがちです。

それでは、クラシック音楽のように精度が求められる世界で、誰もが安心して力を発揮できる場をつくるには、どうすればよいのでしょうか。

4 クラシック音楽の環境と包括性

クラシック音楽の世界は、伝統的に高い完成度や厳格な訓練が重んじられてきました。幼少期から「完璧な演奏」を目指すことが求められ、オーケストラでは、指揮者とのやりとりをセクションリーダーが担うなど、明確なルールや階層があります。これらの仕組みは、作品の精密さを保つためには有効ですが、同時に、神経多様性のある人々にとっては緊張や疲労を生じやすい環境にもなりえます。

だからこそ、誰もが参加しやすく、理解と安心に満ちた音楽環境を考え直すことが求められています。

ある参加者は、大学在学中に診断を受けたときのことをこう振り返ります。

「診断を受けて先生に打ち明けた時、どう受け止められるか不安でした。でも先生は『わかった、じゃあ一緒に取り組もう』と言ってくれたのです。それからは、自分に合った学び方を一緒に模索してくれて、本当に支えられました。」

また別の参加者は、思いやりのある指導の大切さをこう語りました。

「良い音楽教師とは、技術を教えるだけでなく、生徒の心の状態を理解しようとする人だと思います。例えば、演奏がうまくいかない時、その理由が疲れや不安にあると気づいてくれる先生がいるだけで、安心して学べます。」

このような指導者の存在は、神経多様性への理解を広げるだけでなく、音楽教育そのものの豊かさを深めるものでもあります。

5 共に学び、理解を広げるために

神経多様性についての理解を深めるためには、信頼できる情報を学び、神経多様性のある方々の体験を聞くことが大切です。また、自分の所属する職場や学びの場が、誰にとっても安心できる環境になっているかを見つめ直すことも有意義です。もし改善できる点があれば、関係者と対話を重ねていくことで、より良い環境を築ことができます。

神経多様性についてオープンに語り合うことは、相互理解を深め、包括的で創造的な社会づくりにつながります。



<プロフィール>

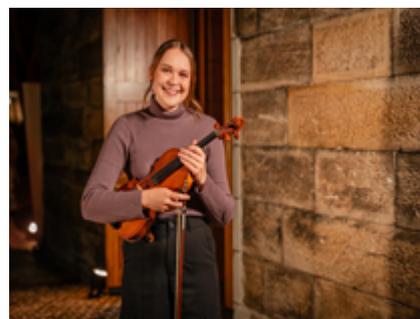
ジュリア・ヒル(Julia Hill)

文部科学省MEXT奨学金を受け、東京藝術大学大学院でヴァイオリンを専攻。

母国オーストラリアでは、オーストラリアン・ユース・オーケストラ、DeepBlue

オーケストラ、カメラータ・オーケストラなどで演奏活動を行う。

音楽教育と演奏心理学を研究テーマとし、現在は、「演奏不安やストレスの軽減に、日本の伝統的な技法—坐禅や“心と体のつながり”のトレーニングがどのように役立つか」を探索している。研究と演奏を通じて、健康的で包摂的なクラシック音楽環境を育むことを目指している。



写真提供:ジャック・マウンジー